

常なる磐

つねなる いわ seasonⅢ

令和 5年 2月 17日(金)

その3 通算 307号

◇ 感謝する会にて



日頃、学校がお世話になっている13名の学区の方に学校にお越しいただき、14日(火)に「感謝する会」を行った。

今年度は、全児童による校歌の鼓笛演奏をプログラムに盛り込んだことから、屋外ピロティーでの開催となった。

『さすがの最上級生』と唸らされたのが、会の運営に携わった3名の6年生だ。



児童を代表して感謝の言葉を述べたK貴さん。背筋がぴんと伸びた立ち姿、まっすぐに向けられた視線、感謝の言葉を自分のものにして会に臨む準備、拡声器なしでもしっかりと聞こえる十分な声量で、見事に代表の責務を全うした。大変立派であった。

K貴さんは、元来、恥ずかしがり屋で、人前に立つことは得意ではなかった。ところが、6年生となったこの1年間は、様々な場面で全体の前に立つ経験を積み重ねることになる。そして、しめくくり間近の2月、経験を力に変えた成長の跡を全校生徒の前で発揮することができた。K貴さんも、間違いなく自分の成長を実感できたことだろう。この成功体験が大きいのだ。

礎は養われた。中学校では、代表的な立場を担い、活躍してもらいたいものだ。



典礼の役割を担ったのはHIYOさん。彼女もそんなに経験はないはずなのだが、手慣れた様子で会を進行させていく。そして、開閉会の言葉を担当したのがKIZUさん。彼はもともと声質がよい上に滑舌がいいので、この役割がぴったりなのだ。そうなってくると、成功を支えた陰の立役者は、児童の持ち味を生かし、適材適所で役割を任せた担任の福田先生だ。4・6年

と2年に渡って子供と接し、児童を知り、理解しているがゆえにできた術である。

HIYOさん、KIZUさん、K貴さんの3人に共通しているのは、いい意味での緊張はあるものの、言動をこわばらせる過度の緊張がない点だ。

HIYOさんに問いかけると、『全く緊張しません』との返答。そのとおりなのだ。

これは、小規模校である本校の環境が起因するところが大きい。経験量である。

低学年の頃から、とにかく人前に出る機会が多い。10人の6年生と30人の学級を比べた場合、単純計算でも3倍だ。そればかりではない。縦割り活動が多い本校では、異学年の前で発表する場面も加わる。

学習発表会(旧学芸会)にしてもそう。担う台詞はかなりの量で、活躍の場も多い。

経験を積み重ねて、人前に立つことに慣れている。ここが、本校児童の強みだ。



鼓笛演奏も然り。カスタネット演奏の1年生も加わった【全校児童による演奏】が可能となる。担任の先生の指示どおり、しっかり指揮者を見る姿も健気だ。



手前の鍵盤ハーモニカを演奏するのは4年生。演奏する姿が板についてきた。対して向かい側は、カスタネットを鍵盤ハーモニカに持ち替えた2年生だ。

驚くべきは、4年生と同じように鍵盤ハーモニカを右手で支え、息を吹き込みながら左手で演奏していること。支え方に甘さは残るが、他校にはない姿だ。

そう考えると、3年生以上は違う。鍵盤ハーモニカを、ぐいと持ち上げている。息を大きく吹き込み、指揮を見て演奏できるのはこのためだ。経験が生きている証。